

中国の歴史教科書における「抗日戦争」

—— 記述の変遷とその背景に関する考察(下) ——

弓 削 俊 洋

1. 「21世紀教育改革」と『歴史課程標準』

① 「21世紀教育改革」

1990年代中国の教育界には三つの大きな変化が認められる。第一に、天安門事件の「反省」から「歴史教育」「愛国主義教育」¹⁾が一層強化されたことであり、教科書【1995】の発行もその中で実施された(本稿(上)第3章参照)。第二は法整備であり、「義務教育法実施細則」「教師法」「教育法」「高等教育法」などの重要法規が次々と制定された²⁾。

そして第三の変化が、新しい世紀を展望した教育改革の推進である。「科教興国(科学技術・教育立国)」戦略³⁾に基づき、初等教育から高等教育までの全教育課程を対象にした抜本的改革が1990年代後半に開始されるのである⁴⁾。この「21世紀教育改革」の成果の一つが教科書【2001】であり、本章では主に義務教育関係の改革内容を検討して新版教科書発行に至る背景を明らかにしておきたい。

義務教育改革の内容は多岐にわたり、九年制義務教育の完全実施、教育管理体制の変革(分権化)、教科書出版事業の規制緩和、入試改革なども課題として挙げられているが、最も核心的な内容は「素質教育」の実施にある。

以下は「素質教育」の基本文献「中共中央・国务院關於深化教育改革全面推

進素質教育的決定」(1999)⁵⁾からの引用である(下線は引用者による)。

素質教育の実施は、…国民の資質向上を根本的な目的とし、生徒の創新能力と実践能力の育成を重点課題とし，“理想、道徳、文化、規律を備え”，徳・知・体・美等が全面的に発展した社会主義事業の建設者と後継者とを作り出すことに他ならない。

素質教育の実施にあたっては、教育活動の各領域において徳育、知育、体育、美育等が有機的に結合する必要がある。学校教育は、知育の実施だけでなく、徳育を重視し、さらに体育、美育、労働技術教育、社会实践を強化させ、…生徒の全面発展と健康な成長を促進する必要がある。

ここから「素質教育」が、知育、徳育、体育、美育(情操教育)、技術教育などを総合的に推進する「全人教育」を意味することが分かる。と同時に、習得させるべき能力として「創新能力(創造力)」と「実践能力(実践力)」を挙げており、素質教育の目的は、一人の人間として社会で生き抜くための「人間力」の育成にある。

もちろん「素質教育」もまた愛国教育、思想教育の一環として位置づけられており、「愛国心」「社会主義への熱愛」「中華民族の優良な伝統の認識」を内容とする「徳育」の必要性が繰り返し指摘されてはいる⁶⁾。

しかし、素質教育の方針は、義務教育に関する調査の分析結果⁷⁾を踏まえて、中国の指導要領や教科書が知育偏重に傾き、授業内容も「難(難解晦渋)、煩(煩雑雑多)、偏(知識偏重)、旧(旧態依然)」という弊害に陥っていることへの反省⁸⁾から提起されたものである。

それ故に、「創新能力」「実践能力」の具体的な中身は、「独立思考」「探求精神」「情報収集・処理能力」「問題分析・解決能力」「言語表現能力」として説明されているし⁹⁾、教育管理体制、教育内容、教学方法、教材編纂、教師養成等およそ教育に関わる全分野において21世紀教育改革が進行中なのである。これらの事実は、「素質教育」の目的が単に愛国主義教育の強化だけにはない

ことを如実に物語っている。

こうして2001年には、教育改革、その中核としての「素質教育」の理念を体現した新指導要領『歴史課程標準』が制定された¹⁰⁾。そこには、知育偏重の是正＝教科内容の精選による負担軽減、教育方法の改善＝「探求式学習」の導入が明確に指示されている。

② 『歴史課程標準』

「課程標準」とは各教科における教育目的、教育内容、教授法、評価などのガイドラインを示したものであり、日本の「指導要領」¹¹⁾に相当する。実際、指導要領と課程標準とは構成上酷似しており、「目標」「内容」「指導計画の作成と内容の取扱い」からなる「指導要領」と、「課程目標」「内容標準」「実施建議」からなる「課程標準」の間に相違点を探すのは困難である。この点から言えば課程標準を中国の指導要領と考えて差し支えない。

もともと、「課程標準は教科書編纂、教学、評価、作問の根拠」「教科書編纂の唯一の根拠」と明記されているように¹²⁾、事実上の「国定教科書」制度を取る中国にあっては、国家の定める「課程標準」が教科書編纂に対してもつ拘束力は「指導要領」よりも遥かに強い。さらに「付録」として記載する「教案例」には教育現場（教室）での指導内容が極めて具体的に記載されており、この点でも「指導要領」との違いが認められる。

ところで、人民共和國建国後の「指導要領」には一貫して「教学大綱」という名称が使用されてきた¹³⁾。一方、「課程標準」の名称は中華民国時代に使用されていたものであり¹⁴⁾—今回の名称変更が民国時代の教育への回帰という意図があるかどうかは別の議論としても—建国後教育に対する大幅な見直し（精算）という方針の下で、教学大綱の改称も行われたのである¹⁵⁾。

そのため、歴史教育のガイドライン『歴史課程標準』には、旧来の「教学大綱」には見られなかった幾つかの特徴が確認できる。

第一に学習者の負担軽減の措置、第二に「探求式学習」の導入、第三には以上を通じた「素質教育」の実践である。このうち負担軽減については、学習内

容の削減や内容の平易化を主たる内容としており、¹⁶⁾「探求式学習」については「分析」「評価」「比較」「討論」といった学習過程を通じて実施するように指示されている。¹⁷⁾ いずれも知識偏重教育の弊害を是正するための方策であり、これによって「创新能力」や「実践能力」などの「人間力」育成を図ろうというものである。

このように、1990年代以降の中国教育界では「素質教育」が重要な課題として提唱され、その課題に対応するために学習内容の精選と学習方法の転換が図られることとなった。教科書【2001】は『歴史課程標準』に準拠し、21世紀教育改革の理念を体現する「実験教科書」として発行されたのである。

2. 課程標準実験教科書【2001】

① 全体的変化

新版教科書『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史 八年級上冊』¹⁸⁾は2001年12月に発行された。教科書冒頭の「説明(前言)」には、編纂の基本方針を三点挙げている。「本教科書の編纂は、『歴史課程標準』の知識・技能目標、過程・方法目標、態度・情感・価値観目標を全面的に貫徹するという前提の下に、以下の三点を特に重視した。第一に、学生の負担を減輕し難易度を下げる。第二に、趣味性、生動性、啓発性を増強する。第三に伝統的な教学方式を転換して、学生の創新意識、実践能力を養成する。」

本章ではこのうちの二点、「負担軽減」と「教学方式の転換」という観点から、教科書の特徴を明らかにしていく。いずれも前章での結果明らかになった『歴史課程標準』の新機軸であり、負担軽減は学習内容の精選により、教学方式の転換は「探求式学習」の導入によって実現されている。

第一に負担軽減についてである。教科書【2001】を手にした最初の感想は「ずいぶん薄くなった」ということである。【1995】教科書(九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史)と比較した場合、冊数(4冊)は同じであるが、総頁数、総字数共に三分の二まで削減されている(表1参照)。

表1 教科書『中国歴史』の量的変遷

教科書	判	冊数	総頁	総字数
【1995】九年義務教育三年制初級中学教科書	B 5	4	778	889,000
【2001】義務教育課程標準実験教科書	B 5	4	521	576,000

スリム化は教材の整理統合、精選によって実現した。例えば旧教科書【1995】では「近代史部分（アヘン戦争～人民共和国建国）」に第三冊から第四冊までの44課、184頁を費やしていたが、新教科書【2001】では22課、122頁までに削減し、「近代史部分」をすべて一冊（八年級上册）に集めて収録している。この「近代史部分」の22課を「7単元」に整理しているのが【2001】の構成上の特徴である。『課程標準』では「古代史」「近代史」「現代史」ごとに「学習主題」を設定し⁹⁾、各主題別に事件や人物を精選して叙述するよう指示する。たとえば「中国近代史」では七つの「学習主題」を設定しており、これを受けて教科書【2001】も七つの単元で構成されているのである（表2参照）。単に事件や事変を時系列に沿って羅列していた従来の教科書とは大きく異なる構成であり、このような学習内容の整理・統合によって大幅なスリム化も実現したわけである。

表2 「中国近代史」の「学習主題」と「単元」

『歴史課程標準』の「学習主題」	教科書【2001】の「単元」
①「列強の侵略と中国人民の闘争」	第1単元 侵略と反抗
②「近代化への第一歩」	第2単元 近代化の探索
③「新民主主義革命の勃発」	第3単元 新民主主義革命の勃発
④「中華民族の抗日戦争」	第4単元 中華民族の抗日戦争
⑤「人民解放戦争の勝利」	第5単元 人民解放戦争の勝利
⑥「経済と社会生活」	第6単元 経済と社会生活
⑦「科学技術と思想文化」	第7単元 科学技術と思想文化

② 教科書【2001】における抗日戦争

教科書【2001】では抗日戦争関係の情報は全て、第四単元「中華民族の抗日戦争」に集められた。表3がその関係部分の目次である（なお、各課共通して「練一練（練習してみよう）」「活動与探求」「自由閲読カード（カード）」を設けているが表では省略した）。

表3 教科書【2001】と抗日戦争

第4単元 中華民族の抗日戦争 p 68~p 87	
第14課	難忘九一八 (九一八事変/西安事変)
第15課	“寧為戦死鬼, 不作亡国奴” (血染蘆溝橋/南京大屠殺)
第16課	血肉築長城 (平型関大捷和台兒庄戦役/百团大戰/中共七大/抗日戦争の勝利)
活動課4	写給日本中学生的一封信—南京大屠殺不能忘記!

表4 新旧教科書における「十五年戦争」の量的変化

旧教科書【1995】	第5課~第12課	総8課	50頁 (p 41~p 90)
新教科書【2001】	第14課~第16課+活動課	総4課	20頁 (p 68~p 87)

本教科書では抗日戦争の起点を1931年「九一八(満州)事変」に求めており、所謂「十五年戦争」の立場を明確にしている。この15年間について、【1995】では8課50頁を費やしていたが、【2001】では4課20頁となり、関係部分の分量(頁数)は五分の二に削減されたこととなる(表4参照)。

それでは旧教科書中の何が削除されたのだろうか。

第一に国民党批判である。『歴史課程標準』の「内容標準」によれば、学習主題名を単に「抗日戦争」ではなく「中華民族の抗日戦争」としたのは、戦争の「民族性、全国国民性」を強調するためであり、この基本理念に基づいて「抗日民族統一戦線の内部闘争に関する知識項目は削減」という「大幅な調整」を行ったとされる²⁰⁾。その結果、教科書【2001】では厳しい国民党批判が姿を消して、旧教科書第10課「抗日に消極的で反共に積極的な国民党」も全面削除されている。逆に国民党軍が勝利した戦闘(「平型関大捷」「台兒庄戦役」など)については小見出しをつけて叙述する²¹⁾など、国民党の果たした役割を強調する誌面になっている。国民党に関しては批判の削除、貢献の強調が明確な方針であり、それは即ち「一致して危急存亡に当たる」という「中華民族の優良な伝統」への教育も使命とする「素質教育」の実践に他ならない。

第二に、旧教科書第9課「日本侵略者の残虐な統治」(p 64~p 69)の削除である。同課は【1995】で新設され、占領地域での「拷問」「児童殺害」「生体実験」「毒ガス使用」「日本語の強要」、金(きん)や現金の収奪、銀行・鉄鉱企

業・炭鉱の接収、農地・農産物・食料の収奪、強制連行、強制労働、万人坑…など多種多様な「罪業」に関する大量の資料が掲載されていた。特に「七三一部隊」の生体実験や「万人坑」については生々しい挿絵によって、日本の「残酷な支配」「野蛮な収奪」を強烈に印象づけたが、新版教科書ではこの部分をそっくり削除したのである。そのほか「三光作戦」「掃討」に関する説明もなくなり、日本軍の残虐行為の情報量は激減したのである。

③ 「南京大屠殺」への集中特化

しかし全面削除というわけではなく、「南京大屠殺」については、日本の残虐行為の「典型」²²⁾として、より詳細に記述されているのである。具体的には、第4単元15課「“寧為戦死鬼、不作亡国奴”」の本文と写真5枚(1頁半)、「自由読書カード」(半頁)、さらに活動課四「写給日本中学生的一封信—南京大屠殺不能忘記！」(2頁半)も加えて、合計4頁半余りを充てている。「十五年戦争」20頁のほぼ四分の一が南京事件に費やされているわけだ。

本文の記述は【1995】と同一であるものの(本稿(上)p66参照)、所謂「百人斬り競争」に関しては、加害者の名前や殺害した人数などを伝える当時の新聞記事(『東京日日新聞』)の写真に掲載している²³⁾点に異同が認められる。

この写真の採用という手法は今次改訂の特徴であり、【1995】で生々しい印象を残した挿絵は一切採用されず、写真掲載に変更されている。この変更は「実証性」強調のための処置であり、中でも「南京大屠殺」については、日本国内で根強い「幻説」「虚構説」を強く意識して、計5枚の「証拠写真」を掲載している(p131「図版資料」)。また写真には以下の説明も付し、「リアルな記録」によって「幻説」を粉碎しようという意図を明言する。「下の数枚の写真は日本軍による南京大屠殺の写真であり、人間性を喪失した日本軍の暴行をリアルに記録したものです。これらは南京大屠殺の大量の写真のうちの数枚にすぎない。しかも、さらに残忍な暴行の多くが撮影されなかったのです。」

なお、「百人斬り」新聞記事以外に「南京大屠殺(原文は南京大屠殺)関連で掲載されたのは、①「日本軍が南京の青年を斬殺」、②「徒手空拳の中国青

年たちを南京郊外に連行して集団殺害」、③「南京の穏和で平和な住民を生き埋め」、④「日本軍が南京の青年を的にして刺殺練習をする」の4枚である。このうち③が教科書【1986】の写真の再掲、④が教科書【1995】の挿絵を写真に差し替えたもの、①②が新掲載である（p 131 図版資料参照）。

図版資料の増加に加えて、新設の「自由閲読カード」でも「“紅十字会”与中国抗戦」と題する南京事件関連の叙述がみられる。「国際的慣例によれば、赤十字会は中立の立場に立っていたので、交戦する双方がそれを犯すことはできない。しかし、南京大虐殺の際には狂気に駆られた日本軍は、なんと赤十字会や国際友人が設立した『安全区（非武装地帯）』に襲いかかり、まったく武器を持たない中国人民を大虐殺し安全区を暗黒、悲惨な人間地獄に変えた。」

このように第15課では本文に加えて、5枚の写真や新設の「自由閲読カード」によって「大虐殺」への糾弾が積み上げられていくが、【2001】最大の特徴は、『歴史課程標準』の新機軸「探究式学習」の題材として「南京大虐殺」が取り上げられることである。

前述のように『歴史課程標準』では従来のような教師の一方的な授業や暗記一点張りの学習からの転換を図るために、「分析」「評価」「比較」「討論」による「探究式学習」の必要性が度々指摘されている（注17参照）。その結果教科書【2001】には「活動課」「活動与探求」欄²⁴⁾が新設され、たとえば「活動課」では、時事問題に関する討論会を開く、日本の中学生宛てに手紙を書かせる、歴史劇を製作・上演する、ガイドとなって歴史名所を案内するなど、従来の授業にはなかった様々な取り組みが用意されている。このような活動を通して生徒の学習意欲を引き出し創造性や実践能力を育成しようというのであり、新教科書の「目玉」とも言える内容である。

この「活動課」は各単元にほぼ1個ずつ設けられており、第4単元「中華民族の抗日戦争」では「写給日本中学生的一封信—南京大虐殺不能忘記！（日本の中学生に宛てた手紙《南京大虐殺を忘れてはいけません！》）」がテーマに設定されている。

「南京大虐殺」を題材にして、日本の中学生に宛てた手紙を書かせようとい

う授業であり、課文は「前文」「活動内容」「活動目標」「活動建議」「附録一 材料（資料）」「附録二 参考書目（参考文献目録）」からなっている。全部で3頁（p85～p87）を充てており、教科書全体がスリム化された中で「活動課」をいかに重視しているかが分かる。新版教科書の目玉であり未見の方も多と思うので、主要な内容を以下に翻訳してみよう。

活動課4 「写給日本中学生的一封信—南京大屠殺不能忘記！」 p85～p87

残酷な南京大屠殺からすでに60年以上がたちました。現在、中国と日本の中学生たちは、南京市内や、長江沿岸の悲惨さわまりない大屠殺について、どれほど知っているのでしょうか？ 1947年初頭の中国軍事法廷と1948年末の極東国際軍事裁判において、日本の戦犯たちに対して正義の審判が下されたことをどれほど知っているのでしょうか？

一衣帯水の隣国同士には永遠の平和が必要です。平和の為に、南京大屠殺を二度と繰り返さないために、同年齢である日本の中学生に手紙を書いて、あなたが知っている南京大屠殺について知らせ、あなたとあなたの祖国がいかに平和を熱愛しているかを知らせましょう。

活動内容

「南京大屠殺を忘れてはいけません！」というテーマで、日本の中学生に手紙を書き、日本帝国主義の犯罪行為を明らかにし、中国人民が侵略に反対し、心から平和を愛し願っていることを説明しましょう。

活動目標

「南京大屠殺」及び今日の日本の教科書問題に関する主要な資料を収集・分析することを通じて、愛国心と社会的責任感を強め、問題を分析したり、歴史資料を運用して説明する能力を高めましょう。

活動建議

1. 本単元の本文の内容を正確に理解した上で、「附録」として提供している資料を閲読しなさい。
2. 更にこの問題と関係する多方面の資料を探し、引用しなさい。また、以

下の方面に関する資料を収集しなさい。

第一 「南京大虐殺」。

第二 「南京大虐殺」重大戦犯への中国軍事法廷（1946～1947年）判決。

「南京大虐殺」の日本戦犯に対する極東国際軍事法廷の判決。

第三 日本右翼分子による歴史教科書中の「南京大虐殺」歪曲の記述。

第四 日本政府による歴史教科書審査状況。

第五 中国政府の態度。

3. 手紙を書く際には、受取人が日本の中学生であることに注意しよう。日本軍国主義や日本右翼分子と日本人民とは区別しなければなりません。

附 録

附録一：材料

1. 中国軍事法廷（項目のみ。紹介文の翻訳は省略する。——引用者）
2. 東京極東国際法廷（同上）
3. ラーベ日記（同上）
4. 東史郎（同上）
5. 「新しい歴史教科書」（同上）
6. 中国政府の態度（同上）

附録二：参考文献目録

1. 『南京大屠殺』（孫宅巍・呉天盛著 中国文史出版社 1997年）
2. 『南京大屠殺』（徐志耕著 解放軍文芸出版社 1997年）
3. 『黒色 12.13』（孫宅巍・李徳英著 青島出版社 1997年）
4. 『南京大屠殺的徹底検証』（新華出版社 2000年）
5. 『中外軍事法廷審判日本戦犯』（胡菊容著 南開大学出版社 1998年）
6. 『拉貝日記（ラーベ日記）』（Rabe, J. 江蘇人民・江蘇教育出版社 1997年）
7. 『魏特琳日記（ヴォートリン日記）』（米明妮魏特琳（ミニ・ヴォートリン）著 江蘇人民出版社 2000年）
8. 主要 URL

<http://www.massaascre.org/index.htm>

<http://www.jsinfo/njm/index.htm>

この「探求課」の特徴は、「南京大屠殺」を過去の歴史事実としてだけでなく、「日本の今」への批判という現代的な課題としても問題にしている点である。そこに教科書【2001】の独自性もあるのだが、「日本の今」への批判はたとえば以下のように展開される。

日本軍国主義が過去に発動した侵略戦争は、中国人民に大きな災難をもたらした。悲惨きわまりない南京大虐殺は、日本軍が中国侵略戦争中に犯した甚だ大きい犯罪の一つである。この歴史的事実に関しては、確固たる証拠(原文「鉄証」)が山のようにあり、この史実を否認しようと企んでも徒勞である。我々は、日本側が実際の行動によって歴史を正視し、歴史を尊重し、歴史を鏡として、歴史の悲劇の再演を防ぐことを要求する。(「附録一 材料6」1998年12月23日、中国外交部スポークスマンの発言)

「大虐殺」は確固たる証拠(鉄証)を有する歴史的事実である、にも拘らず現在の日本では「この史実を否認しようと企んで」いるというのである。その象徴が『新しい歴史教科書』であり、同教科書の発行を容認した日本政府とともに厳しく断罪される。

2001年、日本の右翼の〈新しい歴史教科書を作る会〉は中学校の歴史教科書を編纂し、〈民族自虐〉資料を一掃するという口実の下に、日本軍国主義が中国、朝鮮、東南アジア各国で犯した侵略犯罪を完全に抹殺した。教科書は南京大虐殺についてこう言う。「戦争中なので、ある種の虐殺は生まれたが、それは決して大虐殺という類ではなかった」。こんな教科書が日本では検定に合格しているのである。(「附録一 材料5」)

さらに「参考書目」には『「南京大虐殺」の徹底検証』²⁵⁾の書名も挙がっている。著者の東中野氏は中国メディアから総攻撃を受けた集会「二十世紀最大の嘘『南京大虐殺』の徹底検証」(2002年1月)²⁶⁾で講演を行ったことでも有名な人であり、その著作が中国で翻訳出版された際には以下のように徹底批判された。「本書の著者・東中野(修道)は日本右翼の代表者の一人であり、徹底検証の名目で、日本の対外的な侵略戦争を美化し、日本軍が南京で行った血なまぐさい大虐殺を一生懸命に美化している。本書翻訳出版の目的は、各級の指導者、幹部研究者の使用に供して、白黒を逆転させようとしている日本右翼分子の正体を徹底的に明らかにすることにある」。教科書【2001】で当該書を「参考書目」に入れるのもやはり「史実を否認しようとする企み」の代表例として槍玉に挙げる意図があつたのである。

その一方で【2001】は歴史的事実としての「南京大虐殺」を証明する多くの「鉄証(確固たる証拠)」を提示している。

「鉄証」の第一は、南京軍事裁判(1947年)と極東国際軍事裁判(1946~48年)の裁判記録である。両裁判は「南京大虐殺」に対する「正義の審判」という前提に立って、「集団殺害された後に証拠隠滅のために死体を焼かれた兵士と民衆は19万人余」「日本軍によって断続的に虐殺された後、慈善団体によって埋葬された死体が15万余」「被害者総数は30万人以上」、現地指揮官が「戦争期間、兵が捕虜や非戦闘人員を恣に虐殺し、強姦し、財産を略奪し破壊するのを放任していた」罪により、死刑に処せられた、などの情報が記載されている(活動課「附録一 材料1」「同2」)。

第二の「鉄証」は『ラーベ日記』²⁷⁾と『ヴォートリン日記』²⁸⁾である。いずれも事件当時に南京に在住していた外国人の日記であり、特に『ラーベ日記』については、「自ら見聞したことを、非常に具体的、緻密、真実に記述」しており「南京大虐殺事件研究のなかで最も大量、最も完全に保存された史料」として推奨されている(活動課「附録一 材料3」)

第三の「鉄証」には元日本軍兵士・東史郎氏²⁹⁾が取り上げられている。東氏は、第16師団歩兵第20連隊第3中隊所属の一等兵として南京戦に参加、80年代

以後は度々南京を訪問して中国人民に謝罪すると共に、従軍中のメモをもとにして書いたといわれる戦中日記『東史郎日記』²⁹⁾を公開した人物。新版教科書では、この日記を「南京大屠殺」の真実の記録であると紹介すると共に、謝罪や日記の公開などの「正当な行動」が「右翼分子の脅迫や迫害を受け、「裏切り者」「売国奴」「軍人の恥」「英霊を冒瀆した」などと罵られ」る日本の状況も厳しく指弾している（活動課「附録一 材料4」）。

このように、裁判記録、欧米人の日記、日本人の従軍日記も「南京大屠殺」の「鉄証」として提示されており、情報量の多さと多様性は従来の教科書に見られなかった特徴である。「虚構」「誇張」という批判の起きる可能性をできるだけ排除して、実証性、客観性、科学性を重視した主張の展開に努めようとする意欲が感じ取れる誌面になっている。しかし同時に指摘しておかねばならないのは、採用された「材料」は基本的に全て中国の主張の正当性を立証するための資料だという事実である。唯一立場の異なる東中野氏の著作を挙げたのも「反動的言説」の見せしめとして集中砲火を浴びせるのが目的である。

この探求課では、生徒5～6人が一班を構成、資料収集、手紙執筆、手紙の発表、自己評価などの共同作業を通じて、「問題を分析したり、歴史資料を運用して説明する能力」（「活動目標」）の習得を目指す。こうした探求式学習は従来の暗記中心の授業や学習方法を改善する試みとして注目されるが、問題はなぜその題材として「南京大屠殺」が選ばれたのか、という点である。事件について【2001】の教師用指導書では以下のように記述する。「南京大屠殺は無数の虐殺事件の典型である。教師は南京大屠殺関連の図版を展示したり、日本軍人の当時の日記を学生に閲読・収集させることを通じて、日本帝国主義の発動した中国侵略戦争の残酷性と野蛮性を暴露しなければならない。この世のものとは思われない悲惨な大屠殺を取り上げるときには、中国人民にもたらした筆舌に尽くし難い災難を体感させると共に、日本帝国主義に対する深い恨みと大きな憎しみを心に刻みつけなければならない」³⁰⁾こうした文脈の中で「南京大屠殺」教育は実施されているのであり、そこに導入される「探求式学習」は、自ら調査し、資料を収集整理するという作業によって、憎悪の記憶を生徒たちの

心に一層定着させるという効果が期待されているのである。

以上のように、【2001】教科書では、旧版第9課「日本侵略者的残暴統治」は削除されたものの、「南京大屠殺」に関する記述や資料は逆に増加しており、本文、写真、「自由閲読卡」に加え、新版教科書の目玉である「探究課」においても取り上げている。日本軍の残虐行為を「南京事件」に特化し、批判の矛先を集中させるという意図が明確に表れているのである。しかも掲載された4枚の写真はそれぞれに衝撃的であり、新設された「探求課4」による探求式学習とも相俟って、野蛮で残酷な日本軍のイメージは生徒たちの心に強く刻印されていくであろう。

なお、「南京大屠殺」については、2003年発行の最新版『語文(国語)』教科書³¹⁾でも事件のルポ³²⁾を10頁にわたり掲載し、「日寇の獣行(日本人の蛮行)」の数々を文章と写真によって再現している。さらに同教科書の教師用指導書³³⁾では、歴史教科書問題や南京事件「幻説」などへの非難が繰り返されている。これらの事実から「南京大屠殺」を日本の犯罪行為の典型として大きく取り上げて、日本の「右翼分子」との全面対決を展開しようという中国政府の「鉄の意思」が読み取れるのである。

3. お わ り に

本稿では抗日戦争に関する記述の変遷とその背景について検討し、文革後の人教版歴史教科書の大改訂が少なくとも3回行われ、これに該当する教科書は【1986】【1995】【2001】であることを明らかにした。

改訂内容は、【1986】【1995】の2冊について言えば、日本の残虐行為について詳細かつ多面的に記述するという方向での改訂であり、共に日中関係の悪化や社会主義体制の崩壊という政治的な背景に基づいていた。

一方、【2001】は、21世紀教育改革で求められた負担軽減(スリム化)と探求式学習を導入して、従来の教科書からの転換を図っている。と同時に、「南京大屠殺」への集中特化、国民党批判の削減という点で、「日本のいま」への

批判や愛国主義の発揚という政治的な課題に応える内容も備えている。このような特徴は人教版以外の教科書にも確認でき、例えば、北京師範大学版課程標準実験教科書（2002年）³⁴⁾では、九一八から日本敗戦までを一つの単元で記述（第4単元 偉大的抗日戦争）、日本軍の残虐行為を南京大虐殺に集中特化（本文+写真2枚+「毎課一得」+「材料閲読」+「自我測評」+「活動建議」）、国民党批判の削除、「探求式学習」の導入（各課に「活動建議」、各単元に「学習与探求」という誌面となっている）。

北京師範大学『義務教育課程標準実験教科書 歴史 八年級上冊』（2002年）目次

第4単元 偉大的抗日戦争	
第17課	“中華民族到了最危險的時候”（九一八事変／不朽的民族戦歌／西安事変）
第18課	全民族抗戰的興起（廬溝橋事変／南京大屠殺／共赴国難）
第19課	把我們的血肉筑成新的長城（血戰台兒庄／百团大戰／衆志成城）
第20課	抗日戦争的勝利（“團結的大會，勝利的大會”／日本無条件降伏／台湾光復）
第21課	歷史的回想—“抗日救亡歌曲聯唱”—學習与探求之四

また、これら新版教科書へ至る「過渡期の教科書」として、教科書【2002】（人民教育出版社版『九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史第四冊』³⁵⁾）が存在する。発行こそ【2001】の後ではあるが、「歴史教学大綱」³⁶⁾に準拠して編纂された教科書であり、構成（5課九一八～12課「抗日戦争的勝利」まで羅列）、抗日戦争の頁数の削減（【1995】の43頁から32頁へ削減）、国民党批判（第10課「国民党消極抗日積極反共」の一部を削除、課全体を必修から自由裁量へ変更）、第9課「日本侵略者的殘暴統治」の一部削除、討論を求める「活動建議」を補充するものの、本格的な「探求課」は未設置、などの点で、【1995】の「短縮版」と言うべきである。

本稿は以上のように、抗日戦争の記述の変遷とその背景の解明という視点から中国の歴史教科書について考察してきたわけだが、管見の限りでは同一観点による本格的論考はみられない。敢えて言えばこれが本論文の「成果」であり「意義」だと言えらるだろう。もちろん多くの点で不十分さがあることも承知の上である。人教版中学教科書に限っても文革以前の教科書への検討ができてい

ないし、小学校や高等学校の教科書にまで広げた調査も必要である。また、21世紀教育改革の進展の中で、旧来の「歴史」と「地理」を統合した「歴史と社会」という総合教科も設置され³⁷⁾、すでに実験教科書³⁸⁾が発行されている。同教科書における「抗日戦争」の記述も検討する必要がある。以上を今後の課題として挙げておきたい。(2006年10月)

注 釈

- 1) 「歴史教育」強化については本稿(上)参照(『愛媛大学法文学部論集人文科学編』20号)。「愛国主義教育」関係の資料は、「關於向全国中小學生推荐百部愛国主義優秀影視片通知」(1993)、「愛国主義教育實施大綱」「國家教委關於貫徹『愛国主義教育實施綱要』的通知」(1994)、「關於向全国中小学推荐百種愛国主義歌曲的通知」(1995)、「關於向宣告中小学推荐百種愛国主義教育圖書的通知」「關於要求各級各類学校在重要場合合奏唱國歌的通知」「關於命名和向全国中小学推荐百個愛国主義教育基地的通知」(1996)など。
- 2) 教育關係の主要法規は、「中華人民共和國義務教育法」(1986年)、「中華人民共和國義務教育法實施細則」(1992年)、「中華人民共和國教師法」(1993年)、「中華人民共和國教育法」(1995年)、「中華人民共和國高等教育法」(1998年)。
- 3) 「科教興國」戰略は1995年8月「中共中央、國務院關於加速科學技術進步的決定」で全国的展開が最初に提起され、第八期全人代第四次會議李鵬報告「關於國民經濟和社会發展—“九五”計畫2010年遠景目標」で國家の基本目標とすることが正式に提案された。
- 4) 教育改革の基本文獻は以下の通りである。教育部・國務院「面向21世紀教育振興行動計畫」(1998年)、「中共中央・國務院關於深化教育改革全面推進素質教育的決定」(1999年)、「教育部「國家基礎教育課程改革項目概覽」(1999年)、「國務院關於基礎教育改革与發展的决定」(2001年)、「教育部「基礎教育改革綱要(試行)」(2001年)。
- 5) 「中共中央國務院關於深化教育改革全面推進素質教育的決定」(1999年 人民教育出版社『中國教育年鑑(2000)』所収)。
- 6) 「要堅定不移地把加強德育摆在素質教育的首要位置」(陳至立「在教育部2000年年度工作會議上的講話」)、「特別要加強德育。現在在学校教育中一個傾向性問題，是對德育重視不够。要對中小學生加強愛国主義，集体主義和社会主義教育，加強中華民族優良傳統，革命傳統和國防教育，加強思想品德和道德教育。…德育工作要適應新形勢的要求，改進方式方法，增強針對性，有效性。」(「努力開創基礎教育改革和發展的新局面—朱鎔基總理在

中国の歴史教科書における「抗日戦争」

- 全国基礎教育工作會議上の講話)。引用は人民教育出版社『中国教育年鑑(2001)』『中国教育年鑑(2002)』による。
- 7) 1993年に全国9省・市の16,000名の中小學生, 2,000名の校長・教員を対象にして実施, 1996年7月~年末に, 教育部基礎教育司・大学研究者等で分析。(王湛「建立具有中国特色的基礎教育課程体系」注10『歴史課程標準(実験稿)解説』p6)
 - 8) 「課程内容過於強調歷史学体系, 仍存在“難, 繁, 偏, 旧”現象。部分教学內容頭緒多, 內容雜, 知識点密度大, 概念多, 理論性偏強, 難度偏高。」(注10『歴史課程標準(実験稿)解説』本文p6)
 - 9) 「智育工作要轉變教育觀念, 改革人才培養模式, 積極实行啓発式和討論式教育, 激發學生独立思考和創新的意識, 切实提高教学質量。要讓學生感受, 理解知識產生和發展的課程, 培養學生的科学精神和創新思维習慣, 重視培養學生收集处理信息的能力, 獲取新知識的能力, 分析和解決問題的能力, 語言文字表達能力以及團結協作和社会活動的能力。」(注5「中共中央國務院關於深化教育改革全面推進素質教育的決定」)
 - 10) 『全日制義務教育 歷史課程標準(実験稿)』(中華人民共和國教育部制定 北京師範大学出版社 2001年7月第1版 2002年4月第4次印刷)。解説書『全日制義務教育 歷史課程標準(実験稿)解説』(中華人民共和國教育部教育司組織 歷史課程標準研制組編写 北京師範大学出版社 2002年5月第1版 2002年6月第二次印刷)。
 - 11) 『中学校 学習指導要領』(文部科学省 編集発行・国立印刷局 平成10年初版 平成16年改訂)。解説書『中学校学習指導要領 解説 社会編』(文部科学省 発行所・大阪書籍 平成12年初版 平成16年一部補訂)。
 - 12) 「国家課程標準是教材編写, 教学, 評估和考試命題的依据, 是国家管理和評估過程的基礎」(注4教育部「基礎教育改革綱要(試行)」)。「《標準》是教科書編写的唯一依据」(注10『歴史課程標準』本文p33)。
 - 13) 初級中学中国歴史に關係するものとしては, 1956年「初級中学中国歴史教学大綱(草案)」, 1963年「全日制中学歴史教学大綱(草案)」, 1978年「全日制十年制学校中学歴史教学大綱(試行草案)」, 1986年「全日制中学歴史教学大綱」, 1990年「全日制中学歴史教学大綱(修訂本)」, 1991年「九年義務教育全日制初級中学歴史教学大綱(試用)」, 2000年「九年義務教育全日制初級中学歴史教学大綱(試用修訂版)」がある。
 - 14) 中華民國時代には以下のような「課程標準」が制定されていた。1913年「中学校課程標準」, 1929年「初級中学歴史暫行課程標準」, 1932年「初級中学歴史課程標準」, 1936年「初級中学歴史課程標準」, 1940年「修正初級中学歴史課程標準」, 1941年「六年制中学歴史課程標準草案」, 1948年「修訂初級中学歴史課程標準」。
 - 15) 「現行的義務教育歷史課程所存在的問題, 主要有:(1)教育觀念滯後, 課程的培養目標已

難適應時代的要求。最明顯的例子是，現行的歷史教學大綱或教科書在課程目標上，所關注的仍是知識目標。教學大綱所呈現的教學目的仍是詳盡而具體的知識目標，而在能力培養上，在情感態度與價值觀的培養上，缺少針對性的行為目標和可操作的具體指向。」（注10『歷史課程標準（實驗稿）解讀』本文p6）

- 16) 「基本消除了現行歷史課程中存在的“難，繁，偏，旧”現象，較大幅度地減少了繁雜的知識點，減輕了學生學習負擔，降低了課程難度。」（注10『歷史課程標準（實驗稿）解讀』本文p17）
- 17) 「凡在內容標準的陳述中使用“分析”“評價”“比較”“討論”等行為動詞的，為運用層次要求。」（注10『歷史課程標準（實驗稿）』本文p35）
- 18) 『義務教育課程標準實驗教科書 中國歷史 八年級上冊』（課程教材研究所歷史課程教材研究開發中心編著 人民教育出版社出版發行 2001年12月第1版 2002年5月第1次印刷 122頁 134,000字）。
- 19) 中國古代史9，近代史7，現代史7的學習主題，世界古代史5，近代史8，現代史8的學習主題が設定された。
- 20) 「突出這場戰爭的民族性，全民性，是我們確定這一學習主題為“中華民族的抗日戰爭”而非單純以“抗日戰爭”相稱的立意，同時它也成選取內容標準時的一個基本思路。依據這一思路，我們對原來初中課程內容進行了較大的調整，刪減了原來教學內容中反映抗日民族統一戰線內部鬥爭的知識點，突出了反映國民黨正面戰場和共產黨敵後戰場的內容，從而使主題線索更為簡潔鮮明。」（注10『歷史課程標準（實驗稿）精讀』本文p80）
- 21) 第16課「血肉築長城」p79「平型關大捷和台兒莊戰役」で，両戦闘を中共軍による「百團戰役」の勝利と併記し，抗日戰爭中の英雄的戰闘の事例として特記している。
- 22) 「通過本課的學習，使學生認識到日本的對華戰爭是一場殘酷的侵略戰爭，特別是通過典型事例南京大屠殺的學習，使學生了解日本帝國主義對中國的野蠻侵略行徑，激發學生仇恨法西斯的情感，樹立為人類和平，民主，進步事業而奮鬥的精神。」（『義務教育課程標準實驗教科書 中國歷史 八年級上冊 教師教學用書』p14）
- 23) 「本圖是遠東國際軍事法庭中國檢察官辦事處保存的《東京日日新聞》的照片。上面是報導向井，野田殺百人比賽的消息和向井，野田的照片。」（『義務教育課程標準實驗教科書 中國歷史 八年級上冊 教師教學用書』p156「図画説明」）
- 24) 「探究課」以外にも「活動与探究」が各課に設定されており，聞き取り調査や討論などの學習課題が指示されている。
- 25) 『南京大屠殺の徹底検証（内部）』（日・東中野修道著 新華出版社 2000）。原書名は『「南京大屠殺」の徹底検証』（展転社，1998）『南京事件の全体像－「南京大屠殺」の徹底検証』（國民會館，1999（國民會館叢書25））。

- 26) 2000年1月23日に大阪市で開催された集会で、中国のメディアから激しい批判を浴びた。『なぜ中国人は日本人を憎むのか』（石平著 PHP 研究所 2002）に詳しい。
- 27) 『拉貝日記』（徳・拉貝 江蘇人民出版社・江蘇教育出版社 1997）。日本語版は『南京の真実』（ジョン・ラーベ著 平野卿子訳 講談社 1997）。
- 28) 『魏特琳日記』（南京師範大学南京大屠殺研究中心訳 江蘇人民出版社 2000年10月）。日本語版は『南京事件の日々 ミニー・ヴォートリンの日記』（ミニニー・ヴォートリン著 岡田良之助・伊原陽子訳 大月書店 1999）。
- 29) 『東史郎日記』（日本・東史郎著 本書訳組訳 江蘇教育出版社 1999），『東史郎戦地日記：1938.10-1939.9』（東史郎著；紀廷許，王丹丹，王鍵訳，世界知識出版社，2000）。日本語の関係資料は、『わが南京プラトーン：一召集兵の体験した南京大虐殺』（東史郎著，青木書店，1987 新装版 1996），『東史郎日記』（東史郎著，熊本出版文化会館，2001），『加害と赦し：南京大虐殺と東史郎裁判』（東史郎さんの南京裁判を支える会編 現代書館，2001）などがある。
- 30) 「南京大屠殺は無数屠殺惨案中の一つの典型。教師通過展示有關南京大屠殺的圖片，讓學生閱讀收集到的日本軍人當時的日記，以揭露日本帝國主義發動侵華戰爭的殘酷性和野蠻性。在揭示這場慘絕人寰的大屠殺的同時，讓學生感受到戰爭給人民帶來的無窮災難，牢記對日本帝國主義的深仇大恨。」（『義務教育課程標準實驗教科書 中国歴史 八年級上冊 教師教学用書』 p 148）
- 31) 『義務教育課程標準實驗教科書 語文 八年級(下)』（語文出版社教材研究中心編 語文出版社出版 2003年1月第1版）。
- 32) 温書林「南京大屠殺」（原載『解放軍文芸』1987年第7期）。注31の教科書では，本文（p 113～p 121）に加え，「思考与練習」（p 121～p 122），「字詞積累」（p 122）を付す。
- 33) 『義務教育課程標準實驗教科書 語文 八年級(下) 教師教学用書』（語文出版社教材研究中心編 語文出版社出版 2003）。「新しい歴史教科書」や南京事件「幻説」については，「課文説明」p 120，「教学建議」p 121，「關於“思考与練習”」p 122等で批判。
- 34) 『義務教育課程標準實驗教科書 歴史 八年級 上冊』（北京師範大学出版社 2002年6月第1版 2002年6月第一次印刷 135頁 145,000字）。
- 35) 『九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史 第四冊』（人民教育出版社歴史室編著 人民教育出版社出版 2002年12月第1版 163頁 178,000字）。
- 36) 『九年義務教育全日制初級中学 歴史教学大綱（試用修訂版）』（中華人民共和國教育部制訂 人民教育出版社 2000年8月第3版 36頁 220,000字）。
- 37) 教育部「基礎教育改革綱要（試行）」（注4参照）によれば，課業負担軽減のために科目統合を行い，「総合科目（課程）」を新たに設置する，という方針が示されている。その

結果、中学社会については、従来の「歴史」「地理」を統合した「歴史与社会」という科目が新設された。現状では、従来の「歴史」「地理」の専門科目を学習する学校と、新総合科目「歴史与社会」を学習する学校とが共存している。(『義務教育課程設置及比例』『中国教育年鑑(2002)』p142)。なお、「歴史与社会」の「課程標準」は、『全日制義務教育歴史与社会課程標準(実験稿)』(一)(二)、解説書は『全日制義務教育歴史与社会課程標準解説(実験稿)』(一)(二)、いずれも北京師範大学出版社刊。

- 38) 『義務教育課程標準実験教科書 歴史与社会 八年級下冊 我們伝承的文明』(課程教材研究所・総合文科課程教材研究開発中心編著 人民教育出版社 2003年12月)

【附 記】

本稿は平成17年度「愛媛大学法文学部人文系担当学部長裁量経費」に基づく研究成果の一部である。

図版資料 各教科書における「南京大虐殺」

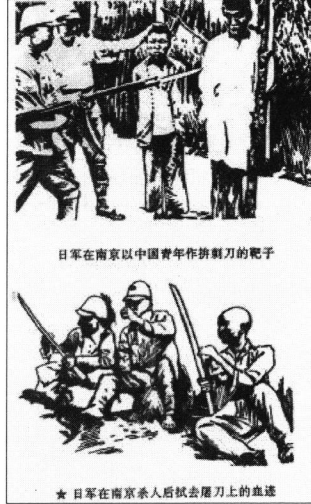
教科書【1986】

「南京大屠殺時日軍活埋中国老百姓の情形」



教科書【1995】

上「日軍在南京以中国青年作拵刺刀的靶子」
 下「日軍在南京殺人後拭去屠刀上的血迹」



新版教科書【2001】

「日軍砍殺南京青年」



日軍砍殺南京青年



日軍將赤手空拳の中国青年押往南京郊外集体屠殺

「日軍將赤手空拳の中国青年押往南京郊外集体屠殺」

《東京日日新聞》



「日軍把南京青年当作刀靶練習刺殺」 「日軍活埋南京和平居民」



日軍把南京青年当作刀靶练习刺殺

